



ヘチマの育て方



●基礎知識

科名：ウリ科
別名：イトウリ、ナーペラー
原産：インド
花期：8～9月

●栽培に必要な準備物

たね、ビニルポット、苦土石灰、堆肥、化成肥料、ヘチマ棚、支柱、麻縄、移植ごて、じょうろ など

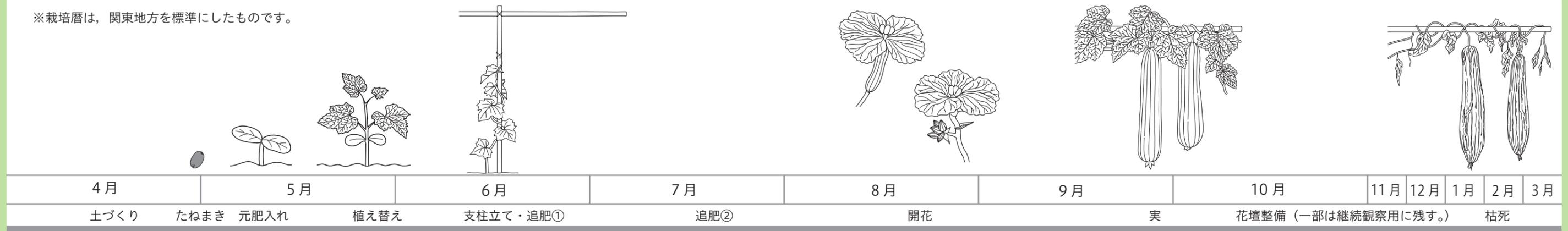
●4年の学習との関連

ヘチマの栽培や観察をととして、植物の成長は季節によって違いがあることをとらえる。
〔副教材：ヒョウタン、ツルレイシ〕

●5年の学習との関連

ヘチマの花の観察や実験をととして、実ができるためには受粉が必要であることをとらえる。
〔副教材：ツルレイシ〕

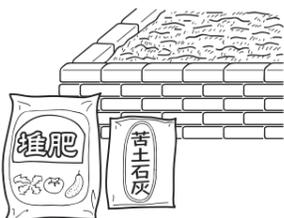
※栽培暦は、関東地方を標準にしたものです。



土づくり

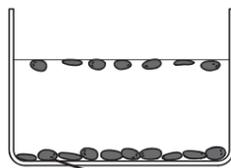
たねまきの下準備として、良質な土づくりを行う。

- ①前に植えた植物の根や雑草を取り除く。
- ②1㎡当たり2kgの堆肥と、苦土石灰2握りを加えてよく耕す。



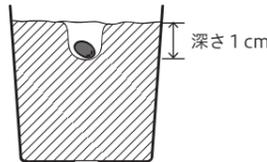
たねまき

種子は、固くて傷のない大きなものを選ぶ。たねまきの2日ほど前から水に浸しておき、容器の底に沈んだ種子をまくようにする。



沈んだ種子をまく。

ビニルポットに土を入れ、深さ1cmほどの穴をあけて種子を1粒まいて水をたっぷりとする。



深さ1cm

元肥入れ

植え替えの半月前から1か月前に植え穴を掘り、底に元肥を入れて土をかぶせ、盛り上げておく。

植え穴は、直径40～50cmで、深さ20cm程度がよい。

入れる元肥は、1株当たり堆肥2～3握りと化成肥料小さじ2杯が目安である。



土をかぶせて盛り上げておく。

元肥

植え替え

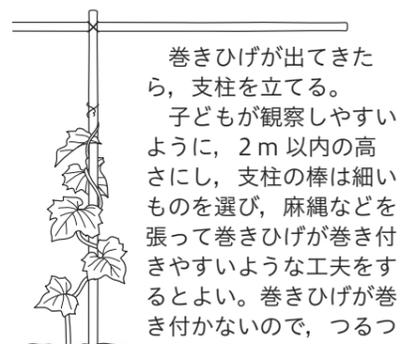
本葉が3～4枚になったら植え替えを行う。

- ①穴を掘り、ビニルポットの土ごと植え替え、上から土をかぶせる。深植えはしないようにする。
- ②植え替え後、水をたっぷり与える。

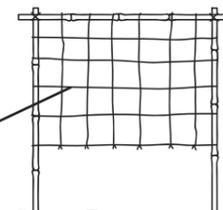
ヘチマは水をたくさん与えると成長がよいとされている。特に茎が著しく伸びる7月下旬から8月上旬には、最も水は必要となる。

支柱立て

巻きひげが出てきたら、支柱を立てる。子どもが観察しやすいように、2m以内の高さにし、支柱の棒は細いものを選び、麻縄などを張って巻きひげが巻き付きやすいような工夫をするとよい。巻きひげが巻き付かないので、つるつるしたビニルひもなどは使用しないこと。



麻縄を張っておくと、巻きひげがよく巻き付く。



追肥

ヘチマは、6月～9月にかけて旺盛に生育するが、栄養が不足すると生育不良を起こしてしまうため、生育が盛んになるころには、追肥が必要となる。

〔追肥のタイミング〕

- ①6月中下旬
つるが盛んに伸び始めたころ
- ②7月中下旬
1回目の追肥から約1か月後

〔追肥の方法〕

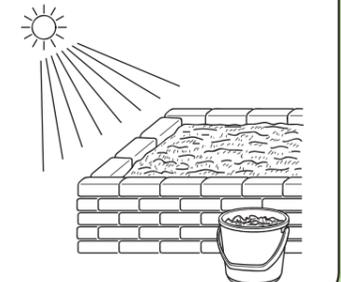
化成肥料を、株のまわりにまくようにして与える。

花壇整備

土は、植物を育てることで、栄養バランスに偏りが生じ、細菌が繁殖するなどして劣化し、次に育てる植物が成長不良を起こしたり、根腐れを起こしやすくなってしまったりしてしまう原因となる。

ヘチマの観察を終えたら、何度も掘り起こしながら雑草や根などを取り除き、腐葉土などを混ぜて栄養を補給するとよい。

また、ヘチマは連作障害を起こしやすいため、ヘチマを栽培した花壇は、次年度はヘチマ以外の植物を育てるようにする。

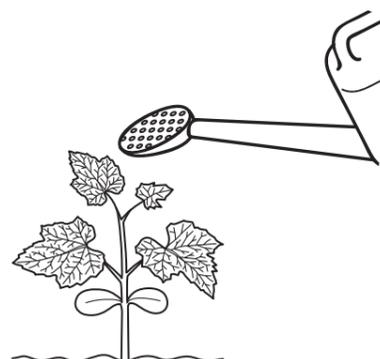


■ヘチマが好む環境

ヘチマは、病害虫に強く、初心者や子どもでも栽培しやすい植物である。しかし、発芽時とその後の育成期も、低温に弱いのが欠点である。栽培の際には温度管理に留意したい。

また、ヘチマは水をたくさん与えると成長がよいとされている。特に茎が著しく伸びる7月下旬から8月上旬にかけては、最も水を必要とするため、植え替え後の水の管理は、当番を決めるなどして十分に学級で話し合いながら管理するとよい。水をやる時間帯は、日中の暑い盛りを避けて、1日2回を目安に、午前9時前後と午後3時すぎにするとよい。水の量は土の乾き具合を見てから決める。

ヘチマは、日光が不足すると生育不良を起こす。たねまきをしたビニルポットは日当たりのよい場所に置き、植え替える場所も1日中日の当たる場所を選んで行うとよい。



■連作障害に注意

ヘチマなどのウリ科の植物は、連作障害を起こしやすい。連作障害とは、土の中の栄養のバランスが崩れたり、特定の細菌やウイルスが繁殖することなどにより、同じ植物を同じ土で連作すると、生育不良を起こしてしまうことをいう。

花壇などの土をすべて入れ替えたり、次年度は別の植物を栽培したりして、3年間はウリ科の植物を育てないようにするのがいちばんだが、堆肥、腐葉土、苦土石灰、化成肥料などを混ぜたり、土の再生材をまいたりすることで、ある程度は防止することもできる。

